

レースっていいよね

第20回 「臆病者と完璧主義者の狭間で」の巻

基本的に無い物ねだりの傾向が強い私は、自分自身がすこぶる半端な人間であるが故に関係する周囲のものには完全、完璧なものを求める。とりあえずそんな訳で、中途半端なものが好きではない。

これは自動車に例えれば最も簡潔に表現できる。つまり、あらゆる人々が、あらゆる目的を持つ市販乗用車はその設計・生産に至る過程で多くの妥協を要する。しかし、いわゆる競技専用車は目的はただ一つ。

「速く走ること」

特にフォーミュラカーはこの最たる自動車だと考えている。

ただし、市販乗用車が妥協の産物であるとはいえ、それがものの良し悪しの判断とは比例しない。何故なら、存在する妥協点は各車ピンキリであり、評価の基準となる価値観は大変抽象的であるからだ。

やはり結論は一つ、「良い物は良い」のだ。この点で、トヨタのヴィッツは好例だと思う。かつてのスターレットの後継車とは考えられないほど、欧州チックでスタイリッシュなデザインであった。初めて見た時などは外車だと感じたほどだ。

この影響は当初販売ターゲットから外れていた日本の、特にオバチャン層の購買意欲を掻き立てた。やはりオバチャンとはいえ、この「よさげなモノ」は感じ入る何かがあったのだろう。加えて低価格である。つまり、街に行くヴィッツの何と多いことか。これはモノ作りの成功例であるといっていると思う。

ところで、改造車は好きではない。要は中途半端だからである。

街中で販売される改造部品の多くは、「見た目」を追求したものが多く。勿論、見た目も性能のうちと言われればそれまでだが。

例えば、よく「音がいい」と呼ばれるマフラー。「音？」何じゃそら。そして、効果の無さそうな「エアロパーツ」。重くしてるだけでは？

それだけでは無い。ここで特記したいのは、それらに仮に性能的な効果が認められたとして、性能を重視した改造を目的とするなら、それら単体を交換したからといって充分ではない。

つまり、排気系をいじれば当然、それだけ吸気系も見直さなくてはならないし、ピストンやコンロッドの形状、材質、クリアランス、重量バランス、またマネージメントするコンピュータもしかり。パワーが出れば動力伝達系統の見直しは必須、クラッチやドライブシャフト、ギヤトレン、全てだ。

ここまですべてやってしまうと潤滑系統もドライサンプ化して、尚且つ重心も下げたい。

当然、エンジンがパワフルならそれを活かせるようなシャーシでなくてはならない。そして、路面を常に捉えられるよう、足回りについても一から見直しである。

こうなると、もはや乗用車ではなくレーシングカーである。最も、ここまでするのは多少オーバーではあるが、「走る・曲がる・止まる」を追求すれば、特に乗用車である場合、規則など無いから性能を追っかけるのは途方も無い作業だと思うのだ。

つまり、チューニングとは何か一つの要因が突出しているのではなく、関連する全てのトータルバランスが必要となるのである。

まあ、「人と同じ嫌だ」という理由は分からなくても無いが、とにかく私の価値判断からすれば「改造」は余り意味が無いと思うので好きでない。ま、人それぞれだ。

とはいえ、その割にパッケージングとしての自動車の好き嫌いうんぬん言うのは単なるワガママなのか・・・。

ともあれ完璧主義者の一端がここにある。

さて、話は変わる。閑話休題。

このHPにもちよくちよく名の出る長谷川の兄イであるが、いい年して一人身の私を心配してか、女の子を紹介してくれることがある。

それが、以外にも(ゴメンっ!)可愛いかったりする。しかし、気持ちは有難いが、とにかく私はそういうのはウイなのだ。せっかくのチャンスでも、そうそう上手くいくかい。

そのくせ、人からは遊び人のように見えるらしく、ギャップが在り過ぎて余計にバツが悪い。そして更に悪いことに、そういう場所にも完璧主義の片鱗が顔を出す。

一方で、私は一目惚れの王者でもある。もし「一目惚れGP」なるモノがあれば間違い無くチャンピオンだ。

兄イの方はともかく、気になる人はいる。そこでまた、今まで培ってきた完璧を求めたい癖が出てしまう。

いずれにしろ、レーシングスポーツで研ぎ澄まされた、この冷静かつ客観的な判断力をもって考察すると、極論すると私は臆病者だというシンプルな答えに行きつく。

「気になる」→「よく思われたい」→「上手くいきたい」という方程式が出来ているから、「もし上手くいかなかったら」という場面を想定してしまい、リスクを犯してまで現状を崩したくないと、何ともお子様チックな調子に納まる。

つまり、「臆病」だから「完璧」という響きの良い言葉にカモフラージュしているに過ぎないのだ・・・と思う。

これがレースの現場であれば打って変わって功を奏すのである。先を読み、「もしこうなった場合はこうする」という最悪のシナリオでもシュミレーションを徹底し、実行する。

自動車教習所でも「だろう運転ではなく、かも知れない運転を励行せよ」というのと同じだ。

ただ、仕事上と異なる点が否めない。それは、自分自身に対する決定的な自信の無さだ。仕事上ではある程度、自分自身の技能レベルについて信じている。過信は無いがそれなりだ。

しかし、プライベートな自分に戻り、レーシングと関係の無い世界に一歩足を踏み込むと、容姿、ファッション、性格、あらゆる面において、第三者からの評価に値する「人間性」を持ち合わせない私はどうしても萎縮してしまう。

仮に少し自信と経験でもあればもうあと一寸、開き直れるのだろうけど。

一応、いつも「完璧」でありたいから、いつも「自信」が無いのだ。完璧なのは神様だけなのだから。と、もっともらしく自分をゴマ化しておこう。

人生の楽しみは何も仕事と恋愛ばかりではない。

ただ、第2回「恋愛とレースの関係」、ホントはこういうことを書きたかった。